

エッセイ

—— 私の文学館散歩 (二) ——

長谷・鎌倉文学館 馬込・旧三島邸

松村 茂治

【長谷・鎌倉文学館】

二〇一五年早春、立て続けに「三島由紀夫体験」をする
ことになった。いずれも偶然のことである。

そのうちの一つは、その春職場を去ることになった同僚
K氏の送別のために、有志数人で鎌倉に行ったときのこと
である。こうした小旅行ではよくあるように、旅の主たる
目的は、その地の美味しい酒と肴を食することにあり、古
都散策は、まさに刺身のツマといったところである。しか
も、鎌倉は、誰もが何度も訪れている所であり、訪問先に
ついて、特段の希望はなかった。そこで、行き先の一つと

して、この日の主役のK氏が提案したのが、長谷駅からそ
れほど遠くない所に位置する正則寺であった。その住職
がK氏の大学時代の先輩に当たるので、久々の再会を果た
したいというのである。

駅を出て、海岸とは反対方向に向かって歩き始めてすぐ
の交差点まで来たとき、以前ここに立ったことがあるとい
う、かすかな記憶が蘇って来た。私たちが向かっていた先
には、長谷の大仏があるので、昔、子どもたちを連れて来
たときのことかと考えてみたが、蘇った記憶はそれほど古
いものではない。鞆からガイドブックを取り出して位置を

確かめ、交差点から鎌倉方面に向かって伸びている道路を
指で辿って行くと、間もなく、心当たりの文字が目に入っ
てきた。鎌倉文学館である。

十年ほど前、前の職場で、附属高等学校の校長を命じら
れていたとき、一年生の遠足の引率で、やって来たのだっ
た。ガイドブックは、その際に購入したものと思われるが、
遠足では国語科の教員が案内をしてくれていたので、自分
で地図を開いて行き先を確認するということはなかったか
もしれない。もっとも、私は、自分が訪問した先の地理に
ついては気になってしかたがない性質なので、現地で見
ることはなくとも、帰ってからその日の行程を確認するこ
とは怠らなかつたと思う。ガイドブックを開けば、そこに書
かれている文字は自ずと目には入って来ると思うので、気
づかなかつたはずはないのだが、いつの間にかすっかり忘
れてしまっていた。そこには、「三島由紀夫『春の雪』に
登場する別荘のモデル」とのキャプションが載っているの
である。

「豊饒の海」全四巻は、各巻が単行本化される度に読ん
できた。第一巻「春の雪」の出版は昭和四十四年、私が大
学三年のときである。読んでいたときには、それなりに理
解していたはずだが、ほとんどの小説がそうであるように

読み終えてしばらくすると、細かい部分の記憶はどんど
と薄れていき、別荘が出て来たことさえよく覚えていない。
長谷の別荘がどのような展開のなかで使われていたのか
を確かめようと、久しぶりに書架から「春の雪」を取り出
してみたのである。たいした時間もかからず、物語の中ほ
どに、「侯爵は清顯とも相談して、夏休みがはじまつたら、
王子たちを松枝家の海邊の別荘へ招き、そこへ清顯をつ
てやることにしたのである。」(二〇六頁)の一節を見つけ
ることが出来た。一度読んだことのある作品ということも
あり、その部分から読み始めたのであるが、なかなかスト
ーリーが思い出せず、途中を飛ばして先を読んでみたり、
後戻りしてみたりしたが、結局、最初から読み直すことにな
ってしまった。そして、別荘が物語の展開にとって、思
いの外重要な舞台として使われていることが分かってきた
のである。

物語の主人公、松枝清顯と綾倉總子との恋愛は、許され
ない恋愛であった。何事もなければ、相思相愛、似合いの
カップルの成立で終わったはずである。些細な言葉の行き
違いと言えいいのか、總子の発した一言が清顯をひどく
動揺させ、總子への復讐を思い立たせることとなってし
まった。總子の言葉は、愛の表現と受け止められてしかる

べきものと思われるが、青年期特有の衿持からか、清顯にはそつは伝わらなかった。行き違いを解消すべく、總子側から再三のとりなしがあったにも拘わらず、清顯は頑ままでに心を開かない。

そつした中、總子には宮家との縁談が持ち上がる。そこで引き返せば悲劇は起こらずに済んだ。清顯が、總子への恋心に気づくのは、縁談に対して天皇の勅許があり、もはや個人の力ではいかんともしがたくなってきてからのことであった。失うときになってはじめてそのものへの愛しさが募るように、彼女への想いを悟り、彼女を取り戻すための行動に出るのである。

最早、二人は白田の下では会うことのできなないところまできている。人知れず逢瀬を重ねるための舞台として選ばれたのが、長谷の別荘だった。はじめ、清顯は、同じ学校に通うタイ国の王子たちと別荘に滞在していることを隠れ蓑に、夜間そこを抜け出し、總子に逢いに行くのだが、やがて、知人の車を使って總子を別荘に呼び寄せ、夜を共にする。

このように、別荘は、物語の進行にとって重要な舞台として使われているが、別荘そのものについては、「先代が建てた茅葺の家は数年前に焼亡し、現侯爵はただちにその

あとへ和洋折衷の十二の客室のある邸を建て、テラスから南へひらく庭全體を西洋風の庭園に改めた」(二〇七頁)と記されている程度で、それほど詳しい描写はされていない。長谷の別荘は、その造りがどうかというより、東京からの距離を最優先に選ばれたに違いない。

文学館についての資料(注)にあたってみると、この建物は旧加賀藩、前田家の別邸として明治二十三年に建てられたもので、古い建物は明治四十三年に焼失したとなっている。この所は、「春の雪」の設定と同じである。その後、昭和十一年に、現在の和洋折衷の建物に改築されたところから、大正初期という小説の舞台設定とは時期が合わない。

改築後も前田家が所有し、昭和五十八年に前田家から鎌倉市に譲渡され、昭和六十年に文学館として開館を迎えたとのことである。三島がこの作品を執筆していた昭和四十年頃には元首相の佐藤栄作が別荘として借用しており、三島はそこに取材に訪れていたようだ。

(注) 鎌倉文学館の建物は、市の景観重要建物等の指定第一号となっており、その資料を参照した。

【帯解・円照寺】

三島が、「春の雪」の最後と四部作の最終巻「天人五衰」の最後の舞台に選んだのは、奈良から桜井線で二駅行った所にある月修寺である。昔、読んだときには、それが実在の寺なのかどうか、実在だとすれば何処にあるのかといったことは全く意に介さなかったが、毎年のように地図を片手に京都、奈良方面に出かけるようになった昨今、奈良近郊にそのような寺があったらどうかと疑問に思うようになった。

「春の雪」では、大阪の病院で墮胎手術を受けた總子が、母親に伴われて暇乞いに月修寺を訪れ、そこで自ら髪を下ろしてしまうという展開になっている。

「……二人は十一月十八日の午下がり、櫻井線帯解の驛に下り立つた。まことに美しい小春日和で黙っている娘を憚りながらも、伯爵夫人の心は和んだ。」(三〇五頁) 駅で車を呼んでもらうと二人はそれに乗り込み月修寺へと向かう。「あまりつらかったので、二臺の俵は幌を外して走った。二三の旅籠のある町を抜けて、しばらく田の間の道をゆき、むかうの山をひたすら目ざしてゆくと、その山ふところに月修寺があるので。」(三〇六頁)

地図を開けば、帯解駅も、そこから人力車で行けそうな

「むかうの山」も、すぐに見つけることはできるが、月修寺という名の寺はない。どこかの寺をモデルにした三島の創作なのだろうと、ネット上の地図でそれらしい立地にあつた円照寺をクリックしてみると、便利な世の中になつたと言えはいいのか、あまりのあつけなさに味気なくなつたと言えはいいのか、そこが「春の雪」の月修寺のモデルになつた寺であることが、丁寧に説明されていたのである。

そこで、その春の奈良旅行では、私たち二人も帯解の駅に下り立つことにしたのである。駅の周囲を少し歩いてみて、三島は確かにここまで取材に来たのだという思いを強くした。それは、作品の中に「……線路沿ひに立ち並ぶ枯木が、向うへゆくほど順々に高くなつて、線路を越える小さな陸橋まで及び、その橋の袂に大そう美しい黄色いものが見えるのに誘われて、夫人は裾をからげて坂道を上がった。(略)陸橋と云つても馬の鞍ほどに小さな木橋で……」(三〇五頁)という一節を読んだからである。確かに、駅から道路へ出るには緩い坂道を登らなければならず、もちろん、枯木も美しい黄色いもの(小菊)もあるはずはないが、線路にかかる小橋は、さすがに木造りではないものの、今でも馬の鞍のようにして、そこにあつた。三島が取材でここを訪れたのは、およそ半世紀ほど前、そして小

説の舞台となったのは、さらにその半世紀以上も前のことであるが、町全体の佇まいは、当時とあまり変わっていないのかも知れない。

我らも山を目指さなければならぬのだが、車を利用しようにも構内タクシーはないし、人力車などあるはずがない。うららかな早春の一日、「むかうの山」を目指して歩き始めたのである。持っていた地図が非常に大雑把なこともあり（比較的詳しい奈良の観光地図は持っていたが、帯解界隈は観光ルートからは完全に外れているのである）、かなりの方向違いをさ迷ったところで、道端の人家で円照寺への道を訪ねてみると、ひと山越えるようにして戻らなければならぬことが分かった。要するに、三角形の二辺を歩くようにして、ようやく円照寺への到着となったのである。

下調べをして分かっていただけだが、案の定、道路沿いの門柱には「通行禁止」の看板が掲げられ、中へ入ることはできなかった。山門は、そこから山懐を数百メートル行った所にあるはずだった。總子が逃げ込んだ御殿もその静謐な庭園も、この目に収めることはできなかったが、帯解まで来たお陰で、三島が、清顯と總子をここまで連れて来たかった理由が分かったような気がしたのである。はじ

めは、資料を見ていて、円照寺が宮内庁に縁の尼寺であることから、總子のような身分の女性が俗界から身を隠すには絶好の場所と想っていたけれど、もう一つ別の解釈の可能性を示唆する情報が、駅近くの瀟洒な古寺、帯解寺にあった。

帯解駅前の看板には、「日本最古安産・求子祈願所 美智子皇后 雅子・紀子妃殿下 安産帯献納所」の文字が記されているのである。「春の雪」では、駅前に、「日本最古安産求祈願霊場 文徳・清和兩帝、染殿皇后勅願所 帯解子安地藏、子安山帯解寺」の立て札があることになっている。もちろん、それは作品の舞台となった、今から百年前のことである。三島がここを訪れた頃、看板には「雅子・紀子妃殿下」の名前はなかったが、「美智子妃殿下」の名前はあったはずである。美智子妃殿下の第一子のお誕生は、昭和三十五年のことであった。

三島を、間近にリアルタイムで見に来たという文芸評論家の高橋英郎は、その著書「三島あるいは優雅なる復讐」で、興味深いエピソードを紹介している。

割腹自殺をした三島の母親を慰めるために三島邸を訪れた女優の長岡輝子が、「……由紀夫さんは、自分のなさ

像力の赴くままに書き上げた私小説である。

その結末は破天荒で、これが戦前ならば不敬罪に当たることを、作者は百も承知で書き進めた。そしてその頃、生涯の計画として、人の意表を衝く『死に場所』を求めていた三島は、その完成の日こそ己の自決の日であると、秘かに決めていた。（二八〇頁）

【あの日のこと】

あの日、日中は穏やかな小春日和だったように記憶している。

その年の三月に大学を卒業した私は、浪人中の身であった。今でこそ、大学の留年者、中退者、そして卒業しても定職に就かない浪人者（まだ、フリーターという言葉はなかった）は珍しくないが、当時は、そうした輩の存在が話題になり始めたばかりで、大学を出てからの浪人は、大学受験のための浪人ほどは社会的な認知は得ていなかった。

私の父は、当初、私が高校を出たら仕事に就かせようと考えていたほどだから、大学出の浪人など想像さえしていなかった。平たく言えば、我が家はそれくらい経済的に余裕がなかったということでもある。そうした家の状況を分かった上で、大学院の受験を考え、浪人生活へ入ったの

月修寺、すなわち円照寺が舞台に選ばれたのは、そこが宮家と縁のある寺だったからに違いないが（一般人の通行を禁じているというのは、説得力ある舞台設定ではある）、高橋の指摘と帯解寺の看板を併せ読むと、むしろ帯解寺の方に意味があったのではないかと思えてくるのである。高橋は、同書のとがきで、次のようにも述べている。

りたいことはぜんぶ成し遂げて、それこそ藤原道長の歌じゃないけれど、『望月』の本望がかなった方じゃありません？……とたずねると、母親は、「……でもあの子にはふたつだけ叶わなかったことがあります。ひとつはノーベル文学賞をもらえなかったことです。」（略）「それともうひとつは、結婚問題です。本命の人と結婚できなかったんです。……お見合いをして、不成立の縁談で、唯一、心残りの方がありません。……それは……どなた？……」「……正田美智子さんです……（略）……もし、美智子さんと出逢っていなければ、『豊饒の海』は書かなかったでしょうし、自決することもなかったでしょう……」（七〇九頁）

三島由紀夫の遺作となった小説『豊饒の海』第一巻『春の海』は、作者が美智子妃への思いをもとに、想

だった。

せつかく浪人するのだから、新しい外国語を身につけてみよう、春から、御茶の水にあるアテネ・フランセに通い始めたのである。その頃、大学院の入試には第一外国語としての英語に加えて、第二外国語としてドイツ語かフランス語が課されるのが常だった。学部時代、第二外国語にドイツ語を選択したが、アイン、ツヴァイ、ドライの次、「四」を何とかが分からないくらいの実力だったので、思い切って新しい言葉を学んだ方が手取り早いだろうと考えたのである。フランス語を選ぶに当たっては、当時読んでいた森有正や辻邦生が大きな影響を与えた。

あの日、一九七〇年（昭和四十五年）十一月二十五日は、一日置きに開講されているムッシュ・Sの授業のある日だった。正規の授業は、二時半頃からの二時間だったと記憶しているが、ムッシュ・Sは、アテネでも人一倍熱心なことで有名な先生で、生徒たちを授業開始の三〇分以上も前に登校させ、助手に予備的な授業をさせてから、自分で本番の授業を行い、その後さらに助手に復習をさせるという念の入れようだった。つまり、かなり中味の濃い授業だった訳で、毎回、しっかりと予習して行かなければその日の授業について行くのは難しかった。その日も、午前中、

テキストをそらで唱え、書くことができるくらいまでの予習を済ませたのだった。少し早めの昼食をとって出かける準備をしていたとき、ラジオからあのニュースが飛び込んできたのである。

その年の七月に単行本として刊行された、「豊饒の海」第三巻「暁の寺」を読み始めたところだった。今、手にしている赤いカバーのこの本を書いた作家が、市ヶ谷でなにやら不穏なことをやっているらしいということは、何とも言えない奇妙な感覚だった。

特に、熱烈なファンというわけではなかったが、これでも三島の小説が読めなくなってしまうのかもしれないということに、ひどく動揺したのを覚えている。いや、動揺は、三島の小説が読めなくなってしまうことよりは、その事件の異様さがもたらしたものだっただかもしれない。後で取り上げる小池真理子の長編「欲望」には、このニュースを聞いた物語の語り手（類子）が、かつて三島世界への橋渡ししてくれた男友だちに電話をかけるという場面が描かれている。このニュースを聞いて、誰かと話をしたくなるという思いはよく分かる。私も、その程度の動揺はしていたと思う。なぜ、誰にも電話をしなかったのかというと、そういう話のできる女友だちがいなかったからに他な

らない。つまり、こういうときの友だちというのは、異性でなければならぬのである。

電話できようができまいが、浪人中の私は学校に向かわねばならなかった。その頃、電車のなかで携帯ラジオを聞くという習慣は、誰も持ち合わせてはいなかった。家を出てしまえば、ほとんど情報は入ってこなかった。三島は腹を切つたらしい、首を刎ねられたらしいという情報を得たのは、新宿駅か御茶の水駅の売店の広告を見てのことだったのではないか。

授業が始まってしまうと、再び情報遮断の状態となった。休憩時間に地下のカフェに行つて情報収集を試みたけれど、三島は死んだらしいということ以外は分からなかった。もっとも、それが事件のすべてだったのだけれど。

授業が終わって外へ出たとき、辺りはすっかり暗くなっていた。復習にいつも以上の時間を取られたのかもしれない。駅の売店には、新聞は一部も残っていなかったように記憶している。

私が、事件のことを気にながら、フランス語の授業を受けている頃、羨ましくなるような境遇から、この事件を眺めている人がいた。

村上春樹の長編「羊をめぐる冒険」（一九八二年）の第一章の表題は「1970/11/25」である。語り手である大学生の「僕」は、火曜日の晩、「僕」のアパートに泊まった女友だちと、翌日には武蔵野の面影を残す東京郊外に散歩に出かけるのが習慣になっていた。この年の十一月二十五日は水曜日だったようだ。この章の副題は、「水曜日午後のピクニック」となっているから（この曜日の設定は間違いないと思う。なぜなら、ムッシュ・Sの授業は、月・水・金に開講されていたはずだから）。

そこには、こんなシーンが描かれている。

我々は林を抜けてECUキャンパスまで歩き、いつものようにラウンジに座ってホットドッグをかじった。午後の二時で、ラウンジのテレビには、三島由紀夫の姿が何度も何度も繰り返し映し出されていた。ヴォリユームが故障していたせいで、音声は殆ど聞き取れなかったが、どちらにしてもそれは我々にとってはどうでもいいことだった。（二十頁）

その後、二人はアパートまで歩き、「僕」は女の子を抱く……

この印象的なICUキャンパスのシーンの描写に先だつて、「一九七〇年十一月二十五日のあの奇妙な午後については、今もはっきりと覚えている。」の一文がある。この作品を初めて読んだ三〇代の頃には、「奇妙な午後」というのは、三島事件がもたらした、あの騒然とした異様な雰囲気のことを言っているものと思っていた。私自身、ラジオの昼のニュースを聞いて以来、ずっと落ち着かない気分を持ち続けていたし、町を歩いていると、明らかに周囲の様子がおかしかった。しかし、今回、読み直してみても、違つのかも少しないと思うようになった。なぜなら、「僕」は、三島のニュースには全く関心を向けていないように読みとれるからだ。「僕」は、三島のことなど気にも留めず、散歩を早く切り上げると、女の子とアパートへ向かったのだ。この日の午後の奇妙さが三島事件のことを言っているとしたら、「僕」はそれを、どこで感じたというのか。だからといって、「この日」「僕」と女の子との間で、特に奇妙なことはおきてはいない。物憂い印象を与えるICUキャンパスでの散歩の後、二人の間にセックスがあり、真夜中になって、「死」について言葉を交わしたりするが、女の子が死んだのは、それから八年後のことである。

がするので、秋だったかもしれない。

左手に湖、右手に樹林帯を見ながら車を走らせていたときである。樹林帯の一部が切り開かれ、花壇を配した公園のような一画が見えてきた。間もなくその入り口と思しきあたりに、「山中湖文学の森」の看板が見え、その脇に「三島由紀夫」の文字を認めたときには、車はその前を通り過ぎてしまっていた。しばらく行った所でUターンをして戻ってきたのだ。

看板の出ている門を入ると、道は樹林帯の中を登って行き、湖が全く見えなくなったところに少し広めの駐車場があり、木々の間に白亜の二階建ての建物が見えていた。暗くなるにはまだ多少の時間があつたが、入場できたとしても、ゆっくり見る時間はなかった。

それ以来、なぜ三島文学館が山中湖の畔にあるのか気になりながら、特にその訳を知るための努力はしてこなかった。三島の作品には、かなり目を通してきたつもりだが、山中湖と縁のある作品を読んだ覚えはなかった。三島と富士山麓を結びつけるものがあるとすれば、自衛隊富士学校への体験入隊くらいのことだった。

数年後、もう一度そこを訪れる機会があつた。このときは、時間をかけてゆっくりと中を見て回ることが出来た

【山中湖・三島由紀夫文学館】

山中湖畔に三島由紀夫文学館があることを知ったのは、偶然のことである。

もう二十年近くも前になるだろうか、この同人誌の主宰者、宗内敦氏が勤務されていた都留文科大学に、非常勤講師として呼ばれていたときのことである。車で出勤したときには、帰りに先生をお乗せして、高尾経由で帰ることになっていたのだ。その日、先生は大学にはおいでになつていなかったのだと思う。偶々、体調を崩されて休まれていたか、サバティカル休暇をとられていたのか・・・午後の授業が終わり、車に戻ったところで回り道をして帰ることに決め、大学前の交差点で車を帰宅とは反対の方向に向けたのである。遠回りにはなるが、それでも、山中湖を半周ほどして「道志みち」を使えば、神奈川県西寄りにある我が家へは、それほどの時間のロスにはならぬ。

この日がいづのことだったか、特に暑くも寒くもなかったということ以外、はっきりとした印象がない。午後の授業を終えても暗くなるにはまだ少し間があつた訳だから、春だったか・・・いや、木々が紅葉していたような気がした。この日がいづのことだったか、特に暑くも寒くもなかったということ以外、はっきりとした印象がない。午後の授業を終えても暗くなるにはまだ少し間があつた訳だから、春だったか・・・いや、木々が紅葉していたような気がした。

一つだけ「おやっ」と思ったのは、展示室の片隅の机の上に広げられていた、遺作となつた「天人五衰」の自筆原稿のレプリカを見たときのことである。原稿用紙を埋めている文字が、どこか委縮しているようで、三島の筆跡ではないような印象を覚えたのである。掛け軸に揮毫した、堂々たる毛筆のあつたことを思い出し、レプリカにある最終章を書き上げて市ヶ谷に向かつたと聞いてもいたので、さすがの三島も動揺を隠せなかつたのかと思つた次第である。しかしながら、最近になって、最後の部分の手書き原稿の写しを見たが、山中湖で見たときの印象とは違つて、堂々としたものだったので、委縮したというのは、私の先入観だったのかもしれない。

二度目に行ったときには、そこに文学館があることは半ば自明のことだったので、改めて「なぜ、この地に？」と、問うことはなかったが、今でも、三島の文学館なら、馬込に建てるのが筋ではなかつたかと思つたのである。

【馬込・旧三島邸】

大田区馬込にある旧三島邸は、今の職場から、距離的にはそれほど遠くないにも拘わらず、なかなか行く機会がなかった。邸は、一般公開されているわけではなく、私の通勤経路に入っているわけでもないからだ。しかしながら、そのうちに・・・と思っている間に、白金に通うのもあと一年余りとなり、うかうかしているとすぐに一年など経ってしまふ、知らないうちに取り壊しにあつとも限らないと心配になり、この春（鎌倉文学館のことを知った後で）、重い腰を上げたのである。

準備のためにネットを開いてみて驚いた。さすが三島と言ったらいいのだろうか、死後四十五年（生きていれば九十歳！）になるというのに、現役の作家でもこれほどの扱いはされてはいないだろうと思われるほどの情報の洪水である。旧邸は馬込文士村の一面に位置することもあつて、訪問者も少なくないようで、多くの写真付きで案内が出ている。

他の情報はともかく、邸宅の住所とそこまでの地図を手に入れることが先決である。探す方からすれば、便利な世の中になったということになるが、探される方からすれば面倒な世の中になったということになるのだろう。いくつ

西馬込の駅で地下鉄を降りて地上へ出た所で方向を見失い、危うく逆方向に進みそうになってしまった。ホームから螺旋状の長い階段を登らなければならなかった上に、地上へ出ると曇り空、東西南北がすっかり分からなくなっていたのだ。

地図と周囲の建物を照らし合わせ、自分の位置が分かってからは、それほど手間取らずに、目的地を指すことができた。ただし、そこは道が縦横直角には交わらず、昔の細い路地が、網の目のようにして残っている所で、道順を言葉で説明することは不可能なような所だ。

旧邸は、駅から十五分程、急な坂を登り詰めた所にあるはずだった。いや、坂はもう少し先まで続いているようなので、坂の中腹にあると言ふべきか。ネットでの踏査を繰り返してきたお陰で、初めてやってきたような気がしない。見覚えのある路地を、右に折れ左に曲がり進んで行くと、傾斜地を利用して作られたガレージが目に入った。その上が庭になっていて、邸はその奥にあるはずだった。ガレージにはシャッターが降り、ガレージとそれに隣接する門の前にはチェーンがかけられ、人の出入りが無いことを示している。それでも、ガレージ脇のコンクリートの壁には、腐食が進んで黒ずんでしまった金属製の表札があり、そこ

かのキーワードを入力して検索すると、必要な情報はすぐに手に入り、ストリートビューを利用すれば、臨場感あふれる疑似踏査ができるのである。

旧三島邸の最寄り駅、地下鉄の西馬込駅は、職場から数駅の所にある。地図を見る限り、駅から旧邸までは、入り組んだ道をかなり歩くことになりそうだ。そこは、閑静な住宅街ということになるようだが、かなり起伏に富んだ土地のようで、しかも狭い路地が迷路状になっているように見受けられる。ストリートビューを見ながら、余計なこととは思いながら、この辺の人は、通勤や通学、買い物などはどのようにしているのだろうか、要らぬ心配をしてみよう。

割腹自殺後に刊行された「新潮・一月臨時増刊号」に掲載されている、自宅のテラスで夫人と並んで寛ぐ三島の姿を写した写真からは、邸が、辺り一帯の家々を睥睨するような場所に建っていることが分かる。主たちのいるベランダのすぐ先から、家々の屋根が遙か遠くまで連なり、その彼方に池上本門寺の大きな屋根が覗いている。三階のベランダとはいえ、これだけの眺望を得るには、土地自体がかなりの高台にあるということなのだろう。

に「三島由紀夫」の文字が浮き出ている。

立ち止まって門の中を覗き込むようなことは憚られたので、初めて訪れた知人宅を探しているかのようにして、目を走らせることになる。門を入った所で、通路は力吉型に曲がっているために、中を見通すことは出来ない。一瞬垣間見えた建物の一部からの連想で、「新潮」に掲載されていた、玄関から門に続くアプローチを、白ジーンズに革ジャンを羽織って颯爽と歩いて来るスナップ写真を思い出した。写真のキャプションには「革ジャンパー姿で気軽に外出した」とあるが、彼は何処へ行くこうとしていたのだろうか。別にどこかに出かける訳ではなく、あれは、撮影のためのポーズだったのだろうか。

邸の周囲を歩いてみて、改めて、三島がこの地に住まいを定めた理由を知りたいと思った。彼がここに新居を建てたのは、昭和三十四年のこと、結婚したのはその前の年のことである。今でこそ、西馬込駅には歩いて出られるが、駅で教えてもらったところによると、地下鉄の開通は昭和四十三年のことである。とすると、当時の最寄り駅は大森駅になるだろうか？ 徒歩で簡単に出られる距離ではない。本人は作家だから、通勤時間など考慮する必要はなかったが、子どもの通学や日常的な外出などのことは考えなかったの

だろうか。

小高い丘の上の住まいは、眺望こそ優れているものの、日常の生活には向いているとは思えない。最近、歳を取ってきたせいで、余計にそう思う。邸へ向かう坂道の途中で、鬱蒼とした樹木に囲まれて打ち捨てられたようにして佇む一軒の廃屋が目にとまった。おそらく、かつては庭つきの瀟洒な住まいだったのだろう。車を使うことを想定していなかった住人には、高齢になったところで、そこは遺棄するしか選択の余地はなかった・・・。

そんな坂を登ったり下りたりしているうちに、眺望の良い高台ということが、三島がここに家を建てた最大にして唯一の理由ではなかったかという思いに至ったのである。自宅のベランダから、遠く本門寺の大屋根が見え、そこまでの街並みを睥睨することができていた。三島にとって、ここはバルテノンの丘だったのかもしれない。庭には、アポロンの像が置かれていたというのではないが。現実の生活より、自分のイメージを優先させるのが彼の生き方だったとすれば、あり得ない話ではない。思えば、彼は、自分の死さえも、そのように自分でデザインしたのだから。

【小池真理子・欲望】

把であるが、一種の三角関係であったとのみ記しておこう（袴田を入れれば四角関係か）。類子に関しては、能勢という、正巳とはある意味で対照的な人物との間で、濃厚な官能世界が描かれるが、これについても同書をお読みいただきたい。

三角関係と言ったが、この作品で大事なものは、一人の男と二人の女との関係ではなく、三島由紀夫と袴田亮介と秋葉正巳の三者関係ではなかったかと思う。袴田と正巳は、ともに、どこか三島と重なり合う人物として描かれ（M A S A M I は M I S H I M A からの連想だろう）、作者は二人についての描写の中に、さりげなく、自身の三島論を展開している。例えば、それは、袴田に、「三島由紀夫も書いていますね。キリスト教が精神を発明するまで、人間は精神なんぞ必要とせず、誇らしく生きていた、とね。三島がギリシヤ人を敬愛したのは・・・」（三三ページ）と語らせる所や、正巳に、「袴田の建てたあの家は、家全体が彼が演じる演劇のための空間になっている。どの部屋もどのコーナーも全部、きちんと計算され尽くしてあって感じがするだろう？一歩、中に入るとあそこはもう、袴田さんが書いた脚本通りに物語が流れていく演劇の舞台なんだ。（略）」と語らせる所に現れている。そして、「何のた

小池真理子の長編「欲望」は、東京郊外に、馬込の三島邸とそっくりな邸宅を建てた男（袴田亮介）についての、物語の語り手・類子の回想から始まる。

この邸宅は、「川崎市多摩区のはずれ、宮前区との境界線にあたる一画であった。小田急線の向ヶ丘遊園駅で降りれば、徒歩でさほどの時間もかからなかった」（一五〇頁）という設定である。そこには、三島の著作のすべてと、彼に関する夥しい数の出版物が集められていることになっている。

地図を広げてみると、どうやらそこは、生田緑地の一画、日本民家園の近辺と推測される。邸宅は、小高い丘の上に聳えていたとのことだから、民家園よりはもう少し上の方、プラネタリウムあたりになるのかもしれない。岡本太郎美術館という可能性もたはないが、そこだと駅から歩くにはやや遠いような気がする。いずれにせよ、わが家からはそれほど遠くはないので、この文章が一段落したら確かめに行ってみようと思う。

袴田亮介と妻の阿佐緒、阿佐緒の中学校時代の同級生、青田類子と秋葉正巳が主たる登場人物である。阿佐緒、類子、正巳の人間関係の詳細については同書をお読みいただくことにして、ここでは、三人の人間関係を、極めて大雑

めに袴田さんは、家も人間関係も暮らし方も・・・人生のすべてを演劇にしたがるの？」という類子の問いに、「秩序が欲しいからだよ。（略）彼自身が混沌としているんだ。袴田亮介という人間は、あの人が自分で作り上げた自己イメージの中にしかないんだよ。現実には存在しないも同然なんだ」（二六八ページ）と答えさせ、質問した類子に「あなたによく似ている」と感じさせている。また、これに一〇〇ページ程先立つところでは、類子に、「・・・いつ会っても袴田には、見事に抑制され尽くした何かを感じられた。（略）そこには、徹底した自己隠蔽を続けるための、鎧の重みばかりが感じられた。彼は自分がまとった堅固な鎧に美しい装飾を施し、鎧であることを見破られないようにしながら生きるのが好きな人種だった。」（一四六頁）と語らせているのだが、これらはすべて小池の三島評そのものである。

正巳は、高校時代に遭った交通事故で下半身に傷を負い、男性機能が働かなくなった人物として描かれている。これは、「仮面の告白」の「私」と通じるところのある人物設定ということになる。肉体的な欲望を遂げることのないまま、正巳は類子のもとを去ることになる。物語の最後、平凡だが穏やかな生活を送る類子が、川崎のあの邸宅が火災

に遭い、ほとんどの三島コレクションを失って閑居する袴田のもとを訪れ、目が不自由になった袴田に乞われるままに、「天人五衰」の最後の部分、あの月修寺の庭園についての場面を朗読するところで、三島由紀夫へのオマージュとも言えるこの小説は幕となる。

【白金・入試会場】

二〇一五年の春に遭遇したもう一つの「三島由紀夫体験」は、入学試験会場でのことであった。

この年の二月七日は、勤務する大学の入試日に当たっており、私には試験監督の仕事が割り当てられていた。試験監督には、受験生に対して試験に関する諸注意を与え、試験問題を配って開始の号令をかけてしまえば、あとは答案の回収まで、不正行為が行われないよう監視の目を光らせている以外、大した仕事はない。

「回答はじめー」の合図の後、受験生たちが取り組んでいる「国語」の問題文を見て、軽い衝撃を覚えた。問題文の最後に、「三島由紀夫」の名前を認めたからである。もちろん、三島の文章が、入試問題に選ばれるのは珍しいことではない。驚いたのは、三月に締め切りを迎える「琅」第二十八号に掲載予定の原稿をおおよそ書き上げ、

この團蔵の生き方を是とし、その最期を「感動的」としてゐる。入試の解答に関わる部分でいうと、その死を、「雷の如き批評であった」と形容し、賛辞を送っているのである。この文章が書かれた一九六六年は、割腹自殺の四年前のことである。三島はまだ、自らの死については具体的に考えてはいなかったのではないか。

しかしながら、三島はこんな風にも書いている。「・・・舞台人生をあれほど嫌った團蔵は、自殺というような人為的な死に方をし、自ら人生をドラマタイズしたことは、人生の尽きぬ謎がある。舞台人生の非名優は、人生舞台の大名優になった。」

三島は、生きている間、ずっと人生舞台でドラマを、主役を演じてきたのではなかったか。最後まで、そうした生き方を変えることはなかった。その三島が、團蔵の死を「・・・人生を一個の崇高なドラマに変え、要するに現実を転覆させた。」と評しているのである。だったら、あれほどのドラマティックな死を選択した三島自身は、自分の死をどのように評したかったのだろう。いや、評して欲しかったというのだろう。

次の文学館散歩に「三島由紀夫」を考えていたからである。試験問題に取り上げられていた文章は、「芸道とは何か」と題された、短い評論文であった。これは、一九六六年（昭和四十一年）六月、その年の春、歌舞伎を定年退職した八代目市川團蔵が、四国巡礼からの帰途、瀬戸内海を行く船から忽然と姿を消したことにについて述べたものである。三島は、早くから歌舞伎に親しんできており、作家となつてからは、いくつかの歌舞伎の台本を書くほどの「歌舞伎通」であった。それだけではない、「春の雪」で、タイ国の王子に歌舞伎を見せることにかこつけて、そこを清顯と總子の逢瀬の場としているし、それはきつと、三島自身のお見合いの会場が歌舞伎座だったことと無縁ではあるまい。ああ、話が横道にそれってしまった・・・。

歌舞伎に詳しくあった三島は、團蔵の芸風や一個人としての團蔵の生き方を、間近に見てきたのだろう。團蔵について、「・・・寡黙な、ふだんは決して己を主張しない人で、どんな役でも引き受け、律儀に舞台をつとめ、その決して面白みがあるとはいえない地味な芸風を押し通した・・・」と記している。三島のこの記述は、私のような、平凡な一読者からみると、ことごとく、三島とは正反対の特徴の持ち主だったとしか読めないのであるが、その三島が、

引用・参考文献

- 三島由紀夫 「春の雪」新潮社 昭和四十四年
- 高橋英郎 「三島あるいは優雅なる復讐」飛鳥新社 二〇一〇年
- 村上春樹 「羊をめぐる冒険」一九八二年 講談社
- 「新潮 一月臨時増刊号」昭和四十六年 新潮社
- 小池真理子 「欲望」平成二十一年 新潮文庫
- 三島由紀夫 「芸道とは何か」昭和四十一年